

論文審査の結果の要旨

氏名：渡 部 淳

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：獲得型教育の理論的・実践的研究

審査委員：(主査) 教授 羽 田 積 男

(副査) 教授 小 野 雅 章

(副査) 広島大学教授 深 澤 広 明

(副査) 明治大学教授 横 田 雅 弘

本論文は、学位申請者が高等学校教員としての自らの経験をもとに試行錯誤を繰り返し、やがて本大学文理学部教育学科の教授に就任し、全国の高等学校を中心とする教員有志との間で共同研究を進めるなかから、「獲得型授業」(acquisition-oriented lessons) という概念を創り、その教育の実践と理論作りにも努め、およそ 30 年にもわたる授業研究を集大成したものである。本論文は、序章、本章（全 4 部全 20 章）、終章、付論（獲得型教育関連用語集）からなっている。

本研究の契機は、学位請求論文提出者が、国際基督教大学高校の社会科教諭とし勤務を始めた時、生徒の多くが 100 ヶ国以上からの帰国生であったことから、伝統的な教科書中心の講義を中心とする授業では多くの生徒に受け入れられず、その授業は生徒との対話的授業あるいは参画型授業へと転換を迫られたためである。この経験が、やがて獲得型授業へと歩を始める契機となったのである。

獲得型授業研究では、その授業目的を「自立的学習者＝自立的市民」の育成と定め、①学習者主体の授業形成、授業スタイルの形成、②獲得型教師論あるいは参加・獲得型学習を成立させる教師の役割と資質、③獲得型学習を成立させるツールの形成、④市民的資質論＝演劇的知をそなえた自立的市民をどう形成するかという 4 つの側面を全体として捉えることを課題と定めている。

本研究では研究方法論として、質的研究の方法を採用している。具体的には、学位申請者自身の授業実践を素材とする当事者研究である。これは「輸入型」学習論の多いわが国の教育方法実践とその研究においては、きわめて独自性の高いものである。その意味では、無著成恭『やまびこ学校』を想起させるものがある。

本研究の意義は、学位申請者が、いわば「輸入型」教授定型的授業、教科書中心主義の授業からの転換の形態として獲得型授業、獲得型教育の理論として提示し、学習論、教師論、アクティビティ論、市民的資質論を中核とする総合的な獲得型教育の理論が形成されたことである。学習システムの開発は最近のアクティブラーニングのような「輸入型」の学習理論によるところが多かったが、本論文では全国の優れた教師のそれぞれの経験や、「国際化」に対応する授業改革案などが糾合されていることである。アクティビティ研究では、教育の現場においてワークショップ、演劇的プレゼンテーションや演劇的学習が実践され研究されているなど、いわば実践と研究の間の応答がサイクルとなって獲得型教育の理論に一層寄与していることである。

今後、この貴重な教育実践の積み重ねを、教育方法論という学問に相対化する作業が残されているが、これはこの研究に参画した多くの教員との共同研究の成果に俟つものと思われる。

よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

平成 年 月 日